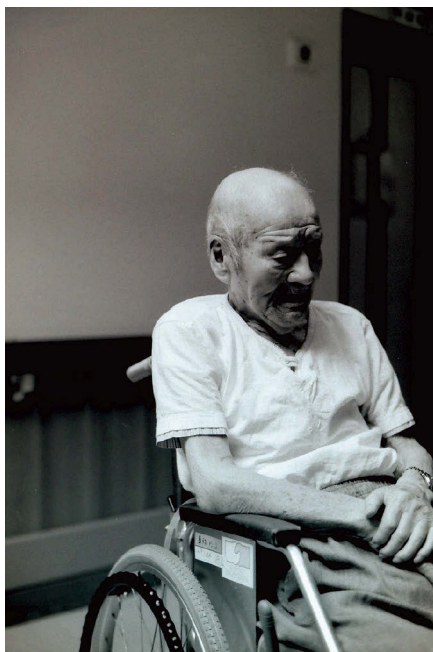


アートとケア

アール・ブリュットから受けるもの

8

アール・ブリュットとは、
美術教育を受けていない人々が創造する「生」の芸術。
心身に障害を持つ作家も少なくない。
あるがままの作家の内なる世界とのやりとりを迫る作品は、
私たちに何をもたらすだろうか。



「おじいさんの写真」
(2011年)

アール・ブリュットと私たち自身の解放

株式会社アマナ／武蔵野美術大学造形学部デザイン情報学科客員教授
上坂真人

閉塞感漂う世界。私たちは喜怒哀楽と問題意識を自由に表現することを忘れて
いる。表現する舞台だったはずのマスメ
ディアは、はるか昔にそのミッションから
逃げ、期待されたデジタルメディアは
虚飾に満ちている。

働く世界では「アートシンキング」な
る言葉が宙を舞うが、実際は組織の決定
プロセスが、パッションあるビジネス
パーソンの表現の芽を摘む。悔しい。

「同調主義はおかしい」と言っていた
人も2020年7月の日本では、同じキー
ワードを並べた発信にとどまっているこ
とを恥じない。私たち自身が^{そんたく}忖度し、自
粛し、狭い世界に引きこもる。インバウ
ンドが増える一方、アウトバウンドが増

えていない事態は軽視される。つまらな
い。

もしかしたら、多くの日本人には表現
すべき喜怒哀楽と問題意識自体がないの
かもしれない。世界のアートシーンで活
躍する日本人アーティストがどんど
減っていることもその表れかもしれない。
おそろしい。

このページの右上に書いてある言葉…
「あるがままの作家の内なる世界とのや
りとりを迫る作品は、私たちに何をもた
らすだろうか」…私たち自身が私たち自
身の内なる世界とやりとりし、考え、悩
み、そして表現しようとしないと何もも
たらさないのかもしれない。私たち自身
の解放。

今月の作家

山口優 Yu YAMAGUCHI

1983年生まれ／京都府

彼女は物心ついた時にはすでに
「緘黙」という症状を抱え、周囲とのコ
ミュニケーションに苦心していた。写
真は20歳の頃から撮り始め、この作
品は2011年頃に、施設に入所して
いる祖父を家族と見舞った際に撮った。
今ではこの写真を撮ったことで、
おじいさんと自分の中にあった感覚を
共有するようつながりを感じている。

(解説：末安民生)

企画協力：NPO 法人キャンサーリボンズ
「サンクスナース」プロジェクト